

ISO9001 次期改正の状況 DIS9001 の対訳版が発行されました

★ISO/DIS 9001 の対訳版が発行されましたね？

－6月16日から日本規格協会の Web Store でも製本した対訳版を購入できるようになりました。

★対訳版も分厚いので、手短にどう変わったのか教えていただけませんか？

－DIS ですからまだまだ変わり得ますし、DIS とはいえ一文一文緻密な議論を経て作られているので、それを手短に説明するということは誤解を生むおそれがあります。お気持ちは分かりますが、まずは規格を読まれることを奨めます。

－とはいえ、どんなことに気をつけて読んだら、DIS を理解しやすくなるかについて、少しお話をしましょう。

★では、お願いします。

－今回の DIS でまず気の付くことは、各種マネジメントシステム規格間の整合を図るために、[附属書 \(Annex\) SL](#) を基本にした記述がされていることです。この整合化のために、規格全体の構成が新しくなったことです。

－2012年に制定され、2013年3月に発行された附属書 SL を基本にした記述にすることは、規格改正のスタートに当たって作られた“規格改正の設計仕様書”に決められていたことでした。

★その「設計仕様書」では、附属書 SL を基本にした記述にすること以外に、どのようなことが決まっていたのですか？

－主なものだけになりますが、まず、どんな領域で運用している、どんな規模の、どんな形態の組織でも使えるように、原則記述にしようということがあります。ですから、自分の組織にぴたっとくる記述にはなっていないかもしれませんが、原則を書いてあると思えば、理解しやすいでしょうね。

－規格のスコープ、表題、適用対象領域は、原則として変えないようにしよう、修正は、2000年以降になって複雑さを増した要求や技術の進歩に対応するものに留めようということがありました。ですから、改正によって一から見直さなければならぬという心配を持つ必要はありません。

—また、顧客の要求する結果を生み出すための有効なプロセスのマネジメントに焦点を当てることを継続しようということもありました。実は、2008年版でも焦点を当てていたはずですが、形式的な規格適合のマネジメントシステムを構築している組織が存在している場合があります。そうさせないような改正を行おうということを狙った設計仕様書でしたから、改めて自らを確認する積極的な姿勢が必要でしょう。

★なるほど、それで DIS に現れている主な変化は何ですか？

—変化しているかどうかは、それぞれの組織が 2008 年版をどのように理解して対応してきたかにかかっているので、一概には言えないことをまず断っておきます。

—その上で、まず、附属書 SL に合わせるために、記述形式が見直しされたということが挙げられます。

—次に、2008 年版ではサービス提供を含めた「製品」という言葉が使われていましたが、「製品及びサービス」という言葉に変わっています。これは、サービス産業にもっと使って欲しいという気持ちを表しています。

—品質マネジメントシステム構築に当たって「組織の状況」を認識することを要求しています。これは、組織の状況を反映しない、規格の言葉を使った品質マネジメントシステムに価値はないということを表しています。

—マネジメントシステムの構築、維持に当たって、「リスク及び機会」に取り組むことが強調されています。リスク対応を考えない組織のマネジメントシステムは借り物でしかないと考えて、導入された言葉です。

—「予防処置」という言葉が消えたことに気がつきます。品質マネジメントシステムの構築そのものが予防処置だという考え方を表しています。ただし、従来の「予防処置」が不要になったということではありません。

—「品質マニュアル」、「管理責任者」という言葉が見えなくなったことも気の付くことです。ですが、「品質マニュアル」、「管理責任者」が不要になったということでは必ずしもありませんので、早とちりをしないように気をつけて下さい。

—この他いろいろあるのですが、まだ DIS の段階ですから、説明はひとまず置きましょう。とにかく、DIS 文をよく読んで下さい。ただし、未だ変わり得るということに気をつけて下さいね。

★DIS の文章で他に留意することがあったら教えてください。

—特に挙げるとすると、DIS の附属書 A には規格の概念を理解するヒントが書い

資料 08-2

てありますから、組織で品質マネジメントシステムを推進する方には、本文だけでなくそちらの方もぜひ読んでいただきたいですね。